

泥畔訛耳成山謂瀬瀬耳時倭飼部從新羅人聞是辭而疑之以爲新羅人通采女耳乃返之啓于大泊瀬皇子○略雄皇子則悉禁固新羅使者而推問時新羅使者啓之曰無犯采女唯愛京傍之兩山而言耳

則知虛言皆原

〔古今著聞集十六興言利日〕主人の武士やうれしくなんゑんだうの寄人は物はきてとをるくるしからぬ事それとゝまれとなまりごえにて高聲にをきてければはしりたちてとゝめけるもの歸にけり。

〔倭訓菜前編大綱〕田舎ことばには濁音多しよて世俗にびるばち、どんぼうがにがへるといへり、是皆訛言也、大よそ倭語の發聲に濁音なし其たまく濁音に唱ふる嶽をだけとし寄居虫をがうなとするが如きは皆後世轉訛のいたす所なるべし。

四國にてばかりをばとのみいひ、美濃三河にてさまをさとのみいふは略音也、三河にて見んすを見ず、きかんすをきかず、行んすをゆかずといふも同じ、又遠江にては何事をいふにも發語にものといひ、三河碧海郡は何事をいふにも、いらを後につく、朝鮮音に南無阿彌陀佛をのみおみとふるいといふが如し。

田舎詞はだみて聞うるを俗になまるといへり、○中万葉集、古今集にも東歌の部を立たり、その詞音韻相通ならでは解得がたし。

〔頃鼠漫筆三〕東訛りを心すべき事

さしてやくなき事にはあれども、東國人の物言には、おもへばをおもひばといひ、こひしきをこへしきなど云事、歌よみ文かく者などの中にも、ともすれば云ひいづる事あり、殊に合せてをあはしてと云へるは然べき學者たちにも、常にしかかけるが見えたる、上方人の見おとすらむと思ふも、いと耻かしき業なり、萬葉集の東歌に、訛謬たる語多く、拾遺集の物名に、あづまにて養は